

ある外国にルーツを持つ子どもへの高校受験支援の事例研究

——地域・家庭・学校との連携を目指して——

田口香奈恵

1. 研究の背景と目的

高校進学は子ども達にとってその後の進路を選択する上で不可欠なステップとなっている。しかし、外国にルーツを持つ子ども達の場合、日本人生徒と同じように高校進学を目指すことはたやすくはない。その阻害要因として、教育提供者側の問題と受験生や家庭の教育需要者側の問題が指摘されている（乾2017）。具体的には、高校入試のシステムが複雑で理解しにくい点、将来像を示すモデルの存在が限定されている点、家族の移動が多く学習の継続性が困難である点などである。また、児島（2008）はブラジル人の若者が進路選択をしていく上で、保護者らへの情報提供不足や進路相談の不適切さなどの学校側の対応が進路を阻む要因の1つだと述べている。

人見・上原（2018）は、外国にルーツを持つ子ども達に対するキャリア支援を行う際に必要となる視点を3点提示している。それは、①彼らを固定的な国やことばという枠組みではなく「個」として捉える視点、②ルーツとなる国やことばとキャリアデザインの関係を彼ら自身が考えられるような働きかけをする視点、③キャリアデザインの連続性を意識する視点である。これらの視座は高校段階の子ども達を中心に提示されたものだが、中学段階でのキャリアデザインにも応用できると思われる。

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」によると、高校在籍の日本語指導が必要な生徒は、前回調査（平成26年度）に比べ3.5ポイント増え、この10年で約2.5倍増加している。これは、公立高校に在籍している外国人生徒の約3割を占めている。その子どもが「日本語指導が必要な児童生徒」であるか否かの判断は各学校に任されているため、実数はさらに多いと言われている。

また、中学校在籍で来日3年以内の生徒が増加している¹⁾こと、高校進学者の中には母国で中学校を卒業してから来日しフリースクールや地域の学習支援教室での支援を経て高校入学を果たした生徒（既卒者）がいることなどを見ても、今後日本語が上達しないまま高校進学を目指す子どもが一層増えることが予想される。

このような状況の中で、地域の学習支援教室が草の根の立場として行政や学校が行き届かな

いサポートを補填し、彼らの背景や特質を把握しながら進路選択へ導いている（乾2013）。地域の学習支援教室は、NPOやボランティア団体などの市民団体によるものが大多数を占めている。これらの市民団体は、理念実現のために柔軟に機動的に動き、様々な外部者と水平的に結びつき協力できるネットワーク型組織とされている（野津2015）。乾や野津は、学校が地域（市民団体）とともにネットワークをつくることが重要であると指摘している。外国人集住地域ではすでに多様なネットワークが形成されている事例もあるが、外国人散在地域でのネットワーク形成やキャリア支援については事例が少なく、地域と学校（行政）が具体的にどのような連携していけば良いかについてはあまり明らかになっていない。

現在、筆者は小規模なボランティア団体の一員として、外国人散在地域のある地方都市の公民館において、外国につながる子ども達を対象にした学習支援教室に携わっている。その中に高校入学者選抜に挑んだ中学3年生がいた。本研究は、その受験生の進路決定に至るまでの過程、地域支援者による受験生と家庭、中学校に対する働きかけを明らかにし、進路選択を促進させた要因を地域支援の視点から探ることを目的とする。また、地域を中心とした支援事例を一連の流れとして詳細に記述することで、外国人散在地域での地域・家庭・学校とのネットワーク形成への示唆を得たい。

2. 研究方法

本研究は「現場生成型研究」の立場を取る。これは、研究者が実践現場に深く参入し内在的に実践に関与する研究である。筆者が関わる実践現場とは、外国人散在地域にある公民館で2016年から開始した学習支援教室である。毎週2回夕方時間帯に教室を開き、中国やパキスタン、バングラデシュなどの外国にルーツを持つ子ども達を対象に、近隣地域の大人支援者や大学生らが学習支援、日本語支援などを行っている。

本研究の分析資料は、筆者が現場に「参加²⁾（野津，2016：83）」した際に記録したフィールドノート、当時の出来事、支援者と筆者との間で交わされたメールの内容である。資料の対象期間は2016年6月～2017年2月の9ヶ月間である。

また、受験生の進路選択・進路支援に直接に関わった人々を対象に実施した、半構造的インタビューの内容も研究データとする。インタビュー調査協力者は、受験生Sと保護者（以下、父親）、中学校の担任教員・学年主任教員（以下、中学校）、地域の学習支援教室に携わる支援者2名（以下、支援者A、B）の計6名である。表1はインタビューの時期とインタビュー協力者の背景を表している。インタビューでは当時は振り返りながら進路支援・進路選択での困難さや解決法、当時の気持ちなどについて聞いた。ICレコーダーに録音し文字化した。以上のデータの扱いはすべて、調査目的や研究倫理、収集したデータの取り扱い等について説明した上で調査協力者の同意を得ている³⁾。

表1 インタビュー協力者

インタビュー協力者	インタビュー調査日	背景
受験生 S (高校1年生)	2017年11月4日	南アジアの国にルーツを持つ 長子 2016年4月から本学習支援教室に参加開始
父親	2017年11月1日	Sの保護者 16年前に来日 自営業(自動車販売)
支援者 A	2018年2月18日	2006～2009年、高等教育機関の家庭教師ボランティアコーディネーター、サービスラーニングセンターのチューター。2011年から筆者と個人的に学習支援を開始。その後、ボランティア団体を設立。近隣地域で様々な支援に携わる
支援者 B	2017年3月16日	大学職員を定年退職。近隣大学主催の多文化共生に関する公開講座受講後、2016年6月から本学習支援教室に支援者として参加開始
中学校の 学級担任教員	2017年3月16日 (学年主任教員同席)	受験生 S の3年次のクラス担任

3. 結果

3.1 進路選択に関わった主な人々

受験生 S の進路選択には、図1のように様々な人々関わった。受験生 S は、図1の全ての人々と何らかの関わりがあった。

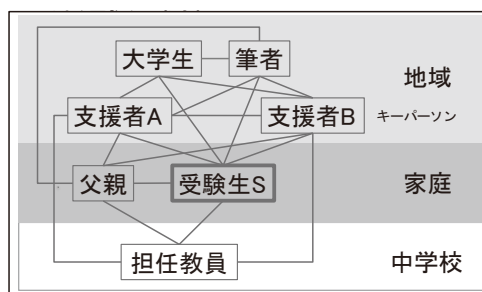


図1 進路に関わった主な人々

特に、支援者 A と支援者 B は S の進路選択上でキーパーソンとなった人物である。支援者 A は中学校と父親をつなぐ役割を果たしている。大学生⁴⁾ は支援者 A の呼びかけで高校見学第9号(2019)

に同行したり、筆者の誘いで学習支援に携わったりした。支援者 B は、S の学習支援に継続的に関わり、高校合格までの長期間 S と最も頻繁に接触している。筆者は、学習しやすい環境を提供するため公民館とは別に S の自宅付近の介護老人保健施設の一室を借りたり⁵⁾、支援者の募集、支援者同士や父親との連絡など本教室全体の運営を担当した。なお本章と次章では、調査協力者の語りや分析資料を直接引用している部分に「 」をつけて提示する。() は筆者による補足である。

3.2 進路決定に至るまでの主な出来事

表 2 は、志望校決定までの出来事を地域・家庭・中学校の各立場から時系列に示したものである。支援者らが進路支援を開始した時点から志望校を決定するまでの 9 ヶ月間を、進路選択の視点から以下の 3 期に分けることができる。

<志望校未定期>

一つは志望校未定期である。S が初めて支援者 A と進路について話をしたのは 6 月である。この時期は「友達が行くから」という理由で志望校を考えていた。夏休みに父親と X 高校を見学しているが、同行した大学生の報告には、「見学する気がない様子で、校舎の見学には行かず 30 分程度で帰った。説明会中もメモを取らず、聞いていない様子だった。危機感が感じられない。お父さんの仕事を継ぐのだろうか。」とあり、S が受験に対する意欲が乏しいことを嘆いている。支援者 B も、S が勉強開始早々に早く帰りたいと言ったり、受験勉強に取り組み始めなければならない時期になっても「いつ始めればいい？」と聞いてきたりする様子を見て、受験生の自覚がないと感じていた。

S と父親は、支援者 A の誘いで高校進学ガイダンスにも参加している。父親にとって高校見学やガイダンスへの参加は、入試制度がわかりにくかったため見学に行っても良かった、いい高校に入ればいい大学に行ってもいいと高評価であった。

<志望校選択期>

2 期目の志望校選択期は、いよいよ具体的に志望校について考える時期である。中学校と父親、S との三者面談直前（11 月下旬）に、母親と弟妹は祖父の容体が悪化したため帰国することになった。母親と弟妹の帰国は翌年夏まで続き、S は 11 月から高校入試までの約 3 ヶ月を母親がいない状態で過ごすことになる。

母親らが帰国した翌日、三者面談が行われた。その直後に父親から支援者 A に電話で面談結果について相談が入る。それを受けて支援者 A は中学校を訪問している。また、同時期は面接シート⁶⁾を仕上げる段階にあったが、志望校が決まらず白紙のままであった。面接シートの提出の締め切りが翌日という話を S から聞いて、支援者 B は急遽暫定的な面接シートの作成を行っている。

志望校が決まらず（S 自身で決めることができず）支援者間で焦りが見え始めた頃、父親から祖父の容体が一層悪化したため 1 ヶ月間一時帰国するという連絡が支援者 A に入る。これ

表2 進路決定に至るまでの主な出来事

日時	地域		家庭		中学校
	支援者A	支援者B	受験生S	父親	クラス担任の 進路指導
志望校未定期	6/22	進路について ヒアリング	公民館で学習支援		1学期 志望校を考える
	8/27	X高校見学送迎 (大学生同行)	X高校見学		夏休みの宿題 志望校を見学する
	10/10	高校進学ガイダ ンスへの誘い	ガイダンス参加		2学期半ば 受験方法を考える (併願か単願か)
	10月下旬		より静かな環境の 別施設で学習支援開始		
	11/27		(母親・弟妹帰国 ~翌年5月)		
志望校選択期	11/28		三者面談		11月下旬 面接シート 仕上げ段階
		中学校に電話		支援者Aに 電話相談	
	12/1	中学校訪問①			
	12/6			支Aに一時帰国 の連絡	
	12/8-12	見学先の高校について相談 →父親に相談・連絡			
	12/9	中学校に電話			
	12/12	Sと面談			
	12/14		一時帰国中の 宿題を出す		
	12/16	Y高校見学同行 (大学生同行)		Y高校見学	
12/17	Z高校見学送り (大学生同行)		Z高校見学		
	S・父親と 個別に面談				
12/19~1/13: 父親・子(S) 一時帰国					
志望校決定期・入試期	1/16	中学校に電話		支援者Aに 電話相談	3学期 志望校決定 最終締切 「特別な受検 方法」申請
	1/18	中学校訪問② →志望校決定	志望校を担当に 伝える		
	1/25, 2/1,8		面接シート作成(最終) 面接練習(3回)		
	2/3			志望校 変更なし	
	2月中旬			入試	
	2月下旬			入学手続き(書類の作成、銀行振込など)	

は筆者を含め支援者らにとって予期せぬ出来事だった。

そこで、一時帰国前に高校見学を実現させるため、支援者AとBを中心に志望校と高校見学先について相談した。その結果、Y高校とZ高校が選ばれた。見学先としてこの2校が妥当か否かを確認するため、支援者Aは中学校に電話をかけ中学校側の「感触を探った(支援者Aのメール)」。その後、Sは支援者Aや大学生らと一緒に2校の高校見学に行っている。Z高校を見学した日の夕方、支援者AはSと父親に個別に面談し志望校の相談をした。その内容

はメールで支援者間でも共有された。その際、Sが「お父さんが高校に行かないかもしれないって話をするから、もうわからない」と涙目で話していたこと、「お父さん自身が（日本で子育てすることを）悩んでいる」という報告があった。その二日後、父親とSは一時帰国した。

<志望校決定・入試期>

3期目は志望校決定・入試期である。1月中旬に一時帰国から戻ってきたSは、志望校をZ高校に決め、担任教師に伝えた。一方、父親は夏休みにX高校しか見学に行っていないためどの高校がよいかわからないと支援者Aに相談している。そこで支援者Aは中学校に電話で父親の相談内容を伝え、二日後支援者Bと一緒に中学校を訪問した。そうして、Sの志望校がZ高校に最終決定した。

その後は、面接シートの作成や面接練習などを経て、高校入試を迎えた。倍率が1倍を超え、合格の可能性も危ぶまれたが、志望校の変更はしなかった。無事に合格した後、支援者Bは高校に提出する書類の作成や学費の銀行振込など入学手続きの支援も行い、最後までSに寄り添い続けた。

4. 進路選択を促進させた要因

前章の表2で示したように、志望校がなかなか決まらず、11月下旬になっても面接シートは白紙のままだった。支援者Bとの学習への取り組みも消極的だった。母親が帰国した11月下旬の三者面談直後に父親から支援者Aに対し電話相談が入った。その後、それまで停滞気味だった志望校選択の状況が好転していった。進路選択を促進させた要因を地域支援者の立場から捉えると、次の4点に集約される。①受験生Sと支援者Bとの関係、②父親と支援者らの関係、③父親・支援者・中学校の繋がり、④高校見学である。これらの要因は個別で独立した事柄ではなく相互に関連しあって進路選択に影響していた。以下、1点ずつ説明する。

4.1 受験生Sと支援者Bとの信頼関係の深化

継続的な学習支援を通して、支援者BのSへの態度が変化している。そのきっかけの一つと考えられるのは、母親が一時帰国したことである。学習支援教室に関わり始めた6月当初は「学習支援で、現場対応で」自分の出来る範囲で支援を行えば良いと考えており、Sには「普通」に接していた。しかし、11月下旬に母親が帰国したことで寂しいと漏らすSの本音に直面し、「より親身になって優しく接するように」なり、「励ましたり褒めたりすることが増え」と述べている。また、「冗談を言ったり茶化したりする」Sとの関わりの中で、勉強以外に「(支援者Bに)関わりたい、あるいは見てほしい」という気持ちを感じ取るようになる。

支援者Bの心境の変化は、「信頼感が増えていく」というB自身の実感からも窺える。支援者Bは数学を中心に学習支援を行っており、Sの実力に合わせて繰り返し練習をさせていた。その結果、Sの試験の点数が上昇し、それと比例するように信頼関係も構築されていった。この

点について次のように述べている。Sも「教え方がすごくうまくて」と支援者Bとの勉強を振り返っている。

【支援者Bの語り】

最初の頃は、お互いにこいつ何者だっという感じはあったと思いますけどね。それと、そういう初めての人間をどこまで信用できるのかっというようなことから、こっちが言ったことをやってみて、そしたら点数が上がって。そうするとだんだん信頼してくるようになる。あ、こいつの言うことを聞いていれば、少しは点数上がるんだなって。それから、問題の解き方とか、だんだんケアレスミスを少なくして行って、で、自分も本番でだんだんその数がケアレスミスが減って行って、点数に結びついていくっていう。ああ、嘘じゃないんだっていうことがね。そうすると日常の会話でも遊びでも、信頼感が増えていくっていうか。(中略)何かで子ども達から信頼されるのが大切ですね、多分。それがあつたら、あとはどの分野でも、遊びでも勉強でも(筆者：何を言っても平気っていうか、強く言っても)ええ、そうです。

一定の信頼関係が構築できた上で、時には「真剣に怒ってみせること」でSの学習意欲を向上させている。支援者Bは、Sが様々な言い訳をして学習態勢に入ることができなかった際、Sを「見放す」態度を示したことがあった。その結果Sは反省した様子でその後の勉強を継続している。Sもインタビューの中で、支援者Bの「厳しさが良かった」と語っている。

さらに、Sは試験の点数が低いことについて頭が悪いからだと言解することが度々あったが、それに対し支援者Bは、低得点と頭の善し悪しは無関係で、単に練習量が十分ではないため得点に結びつかないだけだと励まし続けていた。支援者Bによるこの励ましもまた、Sの消極的な態度を変化させていった。

支援者BはSの本音や態度に寄り添いながら叱咤激励し、B自身の態度や心境が変化していく中で、Sとの信頼関係を構築し深化させていった。Sも支援者Bと「会えて良かった」と語っている。

さらに支援者Bは、地域支援者が果たす役割は学習支援だけではないと判断し、面接シートの作成や面接練習、入学書類の作成、銀行振込の同行など必要に応じて支援している。Sとのやり取りの中で父親の読み書きの日本語力が乏しい事実を知り、Sが他の同級生に比べ、「親をサポート」しながらこれまで「かなり努力していた子」だと考えるようになる。面接シート提出や学費納入の締切期日が迫る中、今は自分以外に支援者はいないと考えたのである。上記でも述べたが、支援者Bは当初は学習支援だけに携わろうとしていた。しかし、Sへの様々な支援を通して、以下のように学校と家庭を繋ぐ地域支援の役割を認識するようになっていく。

【支援者Bの語り】

私は学習支援だけ考えていたんですけど、むしろこっちのね、中学校と支援団体⁷⁾との

連絡網ってというか、こういう支援団体と人間がいますよっていうことを、中学校に教えておいたほうがいいっていう、いいのかなっていう気はしたんですね。

支援者Bの語りから、子どもへの支援を通して得られた様々な気づきや学びが、支援者の意識を大きく変化させていく様子が観察された。最初是对症療法的な関わりだったとしても、継続的に根気よく支援していく中で子どもに適度に寄り添い信頼関係を構築させていく姿は、地域支援者として学ぶところが多くあると思われる。

4.2 父親と支援者らとの信頼関係の構築

Sの父親は地域支援者らに対して、出会った初期の頃から信頼を寄せていたように感じている。父親は日本での仕事の成功や16年にわたる日本人との付き合いを通して、日本人に対して「騙す人」や「悪い信用」がないと肯定的な評価をしていた。また、本教室の学習支援は「うちではできないこと」で、自宅までの送迎や母親の悩み相談などにも応じていることを見て「幸せ」で「100%いい」と感じていた。父親によるこれらの評価は、地域支援者らと良好な関係を築くために良い影響を与えていたと思われる。

父親に初めての高校受験で大変だったことについて尋ねると、以下のように話している。

【父親の語り】

何も知らなかったから。だれも私達も。お母さんもSも誰もわかっていないことは、どうやっていいとか、ほんととわかんなかった。(中略) 本当はもしかしたら、先生達(本教室の支援者ら)と出会わなかったら、そこまで行かないかもしれない。あと、もし学校か誰か頼る人なかったら行かない。だって、自分の周り、そういう友達もないじゃん。(中略)先生達のおかげで、やっぱり、あの、いろいろ情報入りながらやった。

最初は高校まで、本当は高校まで行かなくてもいいなと思ったのよ。最初ね。(筆者：S?) そう。それ他の日本人友達いるのよ。その人は一人子どもいるから、今、大学生。(中略) その人は、やっぱりね、高校まで行かしていいよ。中学じゃダメだよって言ったの。最低でもやっぱり高校までしなさいよって言ったの。そうしたらもし困ったことがあっても、いろいろと仕事みつかると。中学だったらねえ、って言ったの。

父親の語りから、当初は進学に関して何をすべきかわからず高校へ行かなくてもいいと考えていたこと、進路について相談できる人や支援が受けられる場がなかったら高校進学を断念する可能性があったこと、日本人の友達から高校進学を勧められ考えが変わったことがわかる。進路情報は、中学校や子どもを通して保護者に何度も発信されていたと思われるが、保護者はそれを十分に把握できていなかった可能性が窺える。また、身近に相談できる人物の有無も進路選択に影響していた。

父親は日本での子育てや将来について様々な悩みや迷いを抱えていた。高校入試制度が理解しにくいことに加え、日本語の読み書きができないこと、日本での子育ては母国に比べて子ど

もがわがままになる可能性があること、日本在住だと母文化を継承しにくいことなどである。これらはインタビューの中でも語られているが、どこで子育てをするかという父親の悩みは、これまでに日本と母国の間を家族を伴って数回往来している事実にも表れている。

夏休みにX高校見学に同行した初対面の支援者Aに、高校受験のシステムがわからず困っていることを伝えている。一時帰国直前には子育てや将来についての迷いも話している。それに対し支援者Aは、父親の正直な気持ちを受け止め、「頼られている」と感じていた。そして、一方的で偏った情報の提示ではなく、メリットとデメリットを含んだ「適切な情報」を「選択できる状態で提示」すること、「通常提供される情報よりも一歩踏み込んだ関わり方を提供すること」に拘った。このような支援者Aの姿勢は過去の支援経験に基づいたものだった。保護者との衝突も覚悟の上で、適切な情報を提示することを心がけたという。Sの父親が支援者Aを信頼した理由について、父親の困り感や不安感を受容するだけではなく、「情報源としての信頼感」があったのではないかとAは分析している。支援者Aは、父親とSの選択肢を広げることを意識しながら、最終的にはS本人が自分で決められるように導いていた。先行研究では、進路選択を阻む要因の1つに保護者への情報提供不足が指摘されているが、支援者Aの情報提供の在り方はその欠点を補填する一つの方法として示唆を与えている。

4.3 【父親⇔支援者⇔中学校】の繋がり

前節で述べたように、父親と支援者A間には信頼関係が構築されており、電話で相談できる関係になっていた。父親は、11月下旬の三者面談後に支援者Aに電話で面談結果を報告しているが、「(中学校の)先生から話を聞いて、(中略)Aに(面談内容を)伝えようかなと思ってもうまくいかなかった」と感じていた。支援者Aのメール報告によると、父親は中学校からX高に合格できる可能性が低いため志望校を再検討する必要があると言われたが、最終的な進路選択を中学校に委ねている様子が見られるとある。つまり、志望校選択について父親と中学校の認識にずれが生じている、現状のままではSが納得して自らの進路を選べなくなる恐れがあると支援者Aは感じたのである。そこで、支援者Aは中学校を訪問し父親の代わりに話を聞くことを申し出、父親から承諾を得た。父親はその旨を中学に伝え、中学校がそれを受容した。

中学校は高校受験のシステムや面談内容がどこまで正確に父親に伝わったか不安を感じていた。インタビュー時も父親との意思疎通が最終的に完全に一致したかはわからないと答えている。また、支援者Aのメールからも中学校側の不安が読み取れる。

【中学校の担任教員の語り】

ご家族が、その受験についての理解が、ないわけじゃないけれども、こっちが伝えたものがそのまま入っているとは思えないし、っていうところで、そこが一番難しかったです。お父さんにどう伝えるか、どうわかっていただくかっていうことが。(中略)なるべくストレートに伝えたつもりではいるんですけど(中略)私がこうやっていったらその通りっていう風に受け止めるよっていうことは支援者Aから言われて、先生がそこ受けても大丈夫って。

大丈夫って絶対言わないんですけど。Sがそうやって言ったからこちらとしては、こういう状況ですって伝えることが、もうそれでOKって思われちゃうことがあるよっていうような話だったんで。そこをどう一致させるかっていうのが。結局うまくできたかどうかは、わかんないですね。

【支援者Aのメール 12月1日：中学校訪問の報告】

(Sの)進路の問題は、結構厳しいもので、12月中にお父さんと本人を含め、だれかが付き添って、受験を考える学校をあちこち見て回って、本人の意思を固めさせる必要を(中学校と)確認しました。

先生が学校で感じておられることと家庭をつなぐ方法は獲得なさっていたとはいいがたく、(父親が)本当に高校受験の仕組みなどを理解していらっしゃるかということに、学校も不安を感じた三者面談だったようで、私たちとの出会いを喜んでくださっている様子でした。

子どもにとって志望校を選択することは、将来の進路にも繋がる人生における1つの分岐点であるとも言える。担任教員の語りからは中学校が事実を正確に伝え理解してもらえるよう努力している様子が窺える。しかし、本人の意志や家庭の意向、現実の学力など様々な要素が絡むセンシティブな問題であるため、限られた時間の中で中学校の意図が家庭に伝わりにくいことも読み取れる。それが母語ではない日本語で行われた場合、一段と伝わりにくくなるのは想像に難くないだろう。

父親の不安を支援者Aが受け止め、それを父親が最初に中学校に繋ぎ、その後支援者Aが中学校の意図を父親に伝えるという3者の図式は、既に家庭と信頼関係がある地域支援者が、学校と家庭をつなぐパイプ役となり得ることを示唆している。ここで重要な点は、父親の不安を支援者Aが直接中学校に伝えたのではなく、父親が支援者Aを中学校に紹介する段階があったことである。中学校の立場から見ると、ある日突然面識のない日本人から電話でSの父親に頼まれて連絡していると言われても、個人情報の保護や信頼性の面から対応が難しいと思われる。そこで父親が果たした緩衝材としての役割は重要だと思われる。担任教員は地域支援者が家庭と学校を繋げたことを個人的には「助かった」と話している。これまでは三者面談に通訳の同席を依頼することもあったが地域支援者が関わることは初めてだった。このような3者のやり取りは、上述した志望校を再検討するときと、最終的な志望校を決定するときに行われた。

一方で、Sの父親のように学校と地域を繋げることができる保護者は多くはないと担任教員は話している。本事例は3者の連携がスムーズに行われたと言えるが、そうではないケースが実際にあることも垣間見られた。

また、担任教員は支援者A・Bと筆者らが中学校近隣の公民館で学習支援教室を開設していることを知らなかった。担任教師は学校だけではできないことがたくさんあるため、もっと早い段階で知っていれば協力し合いながら支援できたかもしれないと振り返っている。実は、筆

者らの公民館での学習支援教室開設の案内は、既に数回中学校管理職に配布を依頼していたが、その情報が中学校の教員全員に周知されていなかったということになる。本教室の支援者間で、案内を学校に配布してもあまり効果がない、つまり学習支援教室に参加する子どもの数が増加しない事実をどう打開するかが課題になっていたが、筆者らは案内の配布依頼だけでは支援を必要としている人物まで届きにくいことを再確認することができた。

4.4 高校見学への誘いと同行

支援者Aは自身の過去の支援経験から高校見学に参加することの意義を見出していた。それは、見学後の中学生が進路選択を自分の問題として捉えるようになり受験への態度が改まること、支援者にとっても見学に同行すると得られる情報が多く、受験まで子どもと「一緒にプロセスを歩める」と感じられることである。Sは志望校を決定するまで3校見学に行っているが、全て支援者Aの誘いによるものだった。

夏休み中、高校見学は中学校の必須課題だったが、支援者AはSとの面談からS一家が進路選択への「意識が低い」と感じていた。そこで、Sに見学に行くよう声をかけるだけでなく、事前に父親にも連絡を取り、当日は高校最寄りの駅まで父子を迎えに行き高校まで送り届けている。また中学生が「大人の支援者より大学生に本音を言うことが多いと思い」大学生に見学同行を依頼している。ここまで細やかな支援をした理由について、支援者Aは以下のよう述べている。

【支援者Aの語り】

一番の問題は、日本人の子どもは、与えられた情報をもとに友達と行こうかなど自分達で動ける。外国ルーツの子どもはまず動かない。見学に行くこと自体、電車に乗ってどこかに行くこと自体がそもそもハードルが高かったりする。それは、過去の何年かの子ども達との関わりの中で私が獲得した現実だった。(中略) 声をかけるだけでは実現しない。

誘うだけでは実現しないという外国ルーツの子どもに見られる傾向は、筆者も経験的に感じている。地域によっては中学校などを通して進学ガイダンスや学習支援教室、高校入試模擬試験など進路に関する案内が子ども達の手には渡る機会はいくつもあると考えられる。しかし、日本語能力などの面で情報弱者になりやすかったり関心が希薄だったりするため、与えられた情報の重要性を理解することが難しく、支援が必要だと考えられる子どもが実際に現地まで辿りつけることは多くはない。子どもの周囲から有意義な支援が適切に行われることは、子どもが次の一步に前進するためにも重要なことである。

Sは夏休み当初、進路について考えることは「めんどくさ」く、高校見学にも消極的だった。1校目に見学したX高の印象を尋ねると「普通」で「あんま印象に残っていない」と答えている。当時は「遊びたい」気持ちが進路選択への意欲を阻んでいた。また、高校進学が実現しない場合は父親の自動車販売の仕事を手伝うことも漠然と考えていた。

志望校が決まらないまま祖父の容体悪化のため一時帰国することが決まる。そこで、一時帰

国前に高校見学を実現させようと、支援者AとBを中心に偏差値や通学時間などを考慮しながら見学先の高校（最終的な志望校）について相談した。その結果、Y高校とZ高校が選ばれたが、そこに至るまで支援者同士の意見の食い違いがあった。それは、合格の可能性が高い高校にわざわざ見学に行く必要があるかというものだった。それに対して支援者Aは以下のように返信している。

【支援者Aのメール】

見学に行くという手間をかけずに合格したいと願うSに、手間をかけることを体験させ、そこにある程度の負担を覚悟で支援をする…、ということが、結構大切なと。もちろん、これまでも支援者Bが（公民館での）支援日以外にもお手間をかけてくださってきたことも、同じ意味だと思えます。（中略）単に入れるか入れないかということではなく、その学校のその場で自分がキャッチするものを大切にすることに気づくよう、可能な範囲で誘っていただければ…です。今それに気づいていなくても、それは後日何らかの実りになるかもしれません。

一見対立しているように見える両者の意見だが、実際行っている支援は「体験的な学びの必要性（支援者A）」という点で共通している。支援者Bは、Aの意見を受容しSと高校見学や志望校決定などについて話をしてみると返信している。

こうして志望校をY高とZ高に絞り、両方を見学に行くことをSに提案した。しかしSはY高のみの見学を希望した。そこで支援者Aは、入学の可能性のある2校を見学することは進路選択を自分で決めるためにも重要であるとSに伝えている。X高の見学同様、Aは高校まで送迎し大学生に同行を依頼し、Sは納得した上で2校を見学した。

Y高見学では、Sは「不良はいるのか」「いじめは多くないか」など素直な疑問を積極的に対応した教員に投げかけ、回答を得ていた⁸⁾。その結果、Y高に対して電車通学が楽しそう、帰宅時に学校最寄りの店に寄れて楽しそう、勉強が厳しくて良いという好評価をしている。

Sは最終志望校を3校目に見学したZ高に決めている。それはSが「全然良かった」「即決でした」「絶対行きたい」と言える理由がいくつもあったからである。案内した高校生の印象が非常に良かった点、他校にない科目に興味を持った点、図書館の雰囲気が良かった点、そして最大の理由は筋肉トレーニングができる「魅力的」な部活動がある点だった。

Sの決断は、競争率が1倍を超え数十人不合格者が出る可能性があるという事実を目の前にしたときも揺るがなかった。Sは受験するZ高の競争率が高いことを知り、志願者が定員割れをしていたY高に志望校を変更すれば合格の可能性が高いことも考えていた。しかし、私立との併願をしていないため一層の努力が必要だと自分を奮起させたこと、部活動への憧れが他校より勝っていたことを語っている。それは、進路選択をS自身で決定したことが大きく影響していたと思われる。無事にZ高に合格し入学を果たした。現在は、「魅力的な」部活動と類似した部に所属している。高校見学を振り返り、Sは以下のように話している。

【受験生 S の語り】

高校見学は絶対行ったほうがいい。そして、自分の好きなことがその学校にあれば、自然とやる気が出てくるんで。少しでも興味持ったら、高校は（見学に）行ったほうがいい。（中略）めんどくさくても少しぐらいは見に行ったらいいと思う。部活ぐらい見たほうがいいと思う。

S の合格は、本人の努力の他に支援者が諦めずに高校見学に誘い同行した結果もたらされたものだとも言えよう。最初は高校見学に否定的だった支援者 B も、S が見学に行ったことを後に肯定的に捉えていた。周囲に勧められるままに漠然と志望校を選ぶのではなく、高校を事前に見て本人の意志でそこに進学することは、入学後に他校が良かったと後悔せず将来の進路を考えていく上でも貴重な経験となる。高校見学は通過すべき重要な過程であると言えるだろう。

5. まとめ：地域・家庭・学校の連携づくりへの示唆

本稿では、一人の外国にルーツをもつ子どもの受験を巡り、地域支援者と保護者、中学校が連携を取りながらサポートした過程をインタビュー調査や当時の出来事を振り返りながら具体的に記述した。

調査・分析の結果、受験生は保護者や学校からの進路支援だけでなく、地域支援者からの働きかけによっても進路を決定していく様子が観察された。また、地域支援者が学校と保護者を繋ぐことで、それまで停滞気味だった進路支援を加速させていた。さらに、保護者・学校と地域支援者との信頼関係構築も重要な役割を果たしていることが明らかになった。地域は家庭の悩みを聞き取り、それを家庭の承諾を得た上で学校に伝えたりする役割も担える。それは、学校には見えにくい地域の小さな支援活動の存在を学校に示す機会になると同時に、学校の抱える困り感を地域が把握するきっかけにもなる。3者のネットワークはこうしたやり取りを通して構築されていくことが示唆された。

図2は、学校と家庭、地域との連携の様子を表した図である。連携前は、学校から家庭に一方方向の情報発信が行われていた。地域と家庭も地域支援者と母親とが送迎や近況報告などで緩

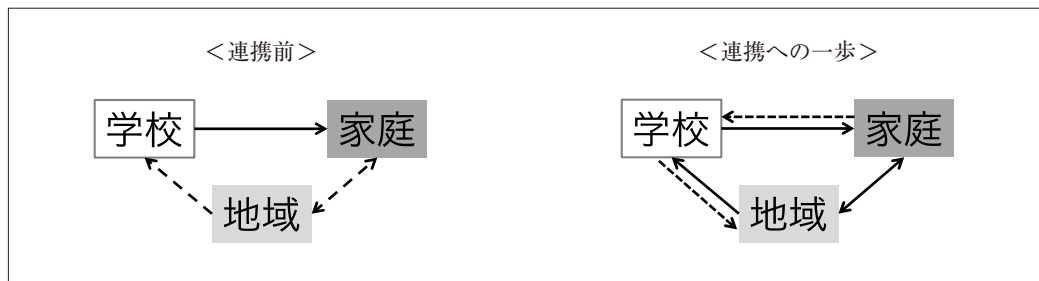


図2 3者の連携の在り方

く繋がる程度だった。地域から学校に対しては学習支援教室の案内に止まり、学校側（担任教員）はそれを把握していなかった。9ヶ月のSの支援を通して、右図のような連携がなされた。左図に新たに加えられた実線矢印は地域・家庭間と地域から学校への繋がりである。これらの連携はあくまでもS支援の事例研究であり他の事例に適応させることができるかは不明である。しかし、本事例から3者の連携への様々な示唆を得ることができた。

先行研究で指摘されてきた学校側の対応の不適切さや、地域支援単独では十分な支援が行き届かず限界がある点、学校と保護者の声が双方に届きにくいため子どもの進路選択を阻害している怖れがある点などは、地域や家庭とのネットワークを形成することで解決できる課題ではないだろうか。また、Sのように地域の学習支援教室に参加している子どもは学校以外の支援を受けることができるが、そうでない子どもで支援が必要な場合は日本語能力などの面で情報弱者になりやすくさらに不利な選択を迫られることも考えられる。学校と地域、家庭の3者が双方向でコミュニケーションを取り繋がることによって、進路選択がスムーズに進み、各立場で抱えている課題を解決しやすくする部分があると考えられる。

人見・上原（2018）が提示する3つの視点のうち、ルーツとなる国やことばとキャリアデザインの関係を彼ら自身が考えられるような働きかけをする視点と、キャリアデザインの連続性を意識する視点は、本研究で得られた結果と重なる面があると思われる。彼ら自身が考えられるような働きかけとは、支援者らがS自身で志望校が決定できるように適切な情報を複数提示した点や、支援者が「覚悟」をしながら受験生と併走した点である。また、そうすることで高校受験という断片的な進路支援だけでなく、将来を見据えたキャリア形成が可能になると思われる。

地域と学校、家庭の連携が外国ルーツの子どものキャリア支援に有効であることが示唆された一方で、地域の人的リソースの発掘や育成は、筆者が携わる小規模市民団体が抱える喫緊の課題である。本稿の支援者AとBは熱心に受験生と家庭、学校の橋渡しを行ったが、このような地域における支援者を増やしていくことが重要である。そのためにはまず本活動の存在を地域市民に伝えていく必要があるだろう。地域講座や教室公開などを開催して、外国にルーツを持つ子どもへの支援の理解を促したり活動に参加してみたいと思う機会を提供したりすることが考えられる。また、対外的信用度を高めるためにNPOなどの組織化も視野に入れることも不可欠であろう。

今後は本研究で得られた知見をもとに、他の支援団体の事例を調査し、地域と家庭、学校のネットワーク構築に向けたより充実した支援の在り方を探っていきたい。また、3者のネットワークの中で、各々がより積極的な役割を担えるにはどのような方法があるかも考えていきたい。

参考文献

- 乾美紀（2013）「外国人児童生徒と高校・大学への接続—3つのNPO・学習支援教室の実践と役割から学ぶ—」『多文化教育をデザインする 移民時代のモデル構築』勁草書房 pp.189-208。
乾美紀（2017）「外国にルーツを持つ生徒と高校進学への壁」『多文化児童の未来をひらく 国内外の

- 母語教育支援の現場から』学術研修出版 pp.72-84.
- かながわ国際交流財団 (2018) 「神奈川県における国際教室在籍生徒の進路にかかわるアンケート調査 結果報告書～対象：2017年3月卒業生～」
- 児島明 (2008) 「在日ブラジル人の若者の進路選択過程—学校から離脱／就労への水路付け」『和光大学現代人間学部紀要』1 pp.55-72.
- 野津隆志 (2015) 「NPO への参加による現場生成型研究—フィールドワークからまなぐ現場との交流—」『異文化間教育』41 異文化間教育学会 pp.63-75.
- 野津隆志 (2016) 「現場生成型の異文化間教育学研究の可能性—現場に根ざし変革を追求する研究とは—」『異文化間教育』43 異文化間教育学会 pp.80-89.
- 人見美佳・上原龍彦 (2018) 「外国につながる子どものキャリアデザイン 『国』『ことば』の認識との関わりに着目して」『移動とことば』くろしお出版 pp.106-124.

注

- 1) かながわ国際交流財団調べ (2018) による。
- 2) 「参加」とは、現場の一員となって現場成員と共に活動し、現場の改善を目指すことである。
- 3) 父親に渡す研究説明書と同意書は、父親の母語に翻訳した。インタビューは全て日本語で行った。
- 4) 「大学生」とは、筆者の所属する大学の学生達である。外国にルーツを持つ子どもへの教育をテーマとした筆者の授業を履修して彼らへの支援に興味を持った学生や、学習支援活動を行っている学生ボランティアグループに所属する学生である。
- 5) 公民館での活動は広い和室で行われているが、宿題や学習を終えた後は子ども達が元気に遊ぶ空間になっている。遊びの時間になると、落ち着いて静かに勉強できる環境ではなくなるため、受験生 S にとっては勉強に集中できないことが何度か見られた。そこで、支援者らと S とで相談し、別の施設の一室を借りることになった。
- 6) 当該県の高校の入学者選抜では、学力審査と面接が課される。「面接シート」は、受検生自身の考えを自分で書き、出願時に入学願書と一緒に提出するものである。面接シートに記入する項目は、志望理由、中学校での学習や活動への取り組み、本人の長所についてである。
- 7) 実際の語りの中では、支援団体の固有名詞を出している。
- 8) 同行した大学生の報告による。